



幼児のふり遊びにおける人形に対する認識の発達— 大人による人形操作の影響に着目して—

大塚, 穂波

(Degree)

博士 (教育学)

(Date of Degree)

2018-09-25

(Date of Publication)

2024-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7260号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007260>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏名 大塚 穂波
専攻 人間発達専攻
指導教員氏名 木下 孝司

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

幼児のふり遊びにおける人形に対する認識の発達
—大人による人形操作の影響に着目して—

論文要旨

本論文は、ふり遊びに用いられる人形を幼児期の子どもがどのように認識しているのかについて、大人が人形を操作することの影響に着目して明らかにした。

第1章では、ふり遊びに関する先行研究を概観し、幼児期には質的に異なる水準のふりの理解が扱われてきたことを明らかにした。およそ3歳頃までの幼児期前半には、他者が呈示した状況に応じて適切なふり行為を産出することができるかどうかという行為レベルのふりの理解が扱われてきた。それに対して幼児期後半には、他者が示す行為の背後にある心的状態としてふりを理解しているかどうかという心的レベルでのふりの理解が議論されてきた。このような質的に異なるふりの理解水準がどのように変化するのかについて、コミュニケーション過程に着目して検討する必要性を指摘した。

第2章では、第1章で述べたふりの理解に関する理論的課題が、先行研究における人形の扱い方にも含まれていることを指摘した上で、ふり理解研究に人形を用いることの有用性に言及した。幼児期前半頃を対象とした研究では、人形は子どものふり行為を促すための刺激として用いられ、それ自体が何らかの要求を示す意図的行為主体として扱われてきた。それが幼児期後半頃には、現実の他者と同等の存在として人形が登場し、それ自体が独自の心的状態を持つ主体として扱われてきた。このように、人形はふり遊びの中ではそれ自身が意図や心的状態を持つ主体として扱われる一方で、実際に人形をそれ自体が動いたり何らかのインタラクションを行う主体であるかのように操作している真の行為主体は大人である。このような「行為主体の二重性」は人形固有の特徴であると言える。これを踏まえ、本論文ではふり遊びに用いられる人形に対する幼児の認識と、大人の人形操作の影響を検討した。

第3章(研究1)では、幼児期前半頃の子どもの人形に対する認識を明らかにするため、1~3歳児を対象に人形を意図的行為主体として扱うことができるかどうか、そのような人形の扱い方を大人の人形操作がどのように支えているのかについて検討した。その結果、1~2歳児も大人の人形操作に支えられることによって人形を意図的行為主体として扱うことができるが、3歳児は「人形を意図的行為主体として扱う」ということを、ふり遊びにおける振る舞い方のルールとして大人と共有するようになることが明らかとなった。よって、3歳頃から行為主体の二重性を理解し始めることが示唆された。

第4章(研究2)では、2歳児を対象に1年間の縦断研究を行い、研究1の結果を追試的に検討した。人形を意図的の行為主体として扱うという共通認識を持つことが2歳代の象徴能力の発達と関連するかどうかについて検討を行ったが、両者の関連は見られなかった。このことから、1~2歳頃の子どもが人形を意図的の行為主体として扱うことができるのは、大人が人形を操作することで人形を介して子どもに働きかけたり、子どもの行為に応答しているからこそであり、この時期には、子どもと人形とのやりとりを支える大人の役割を子ども自身が明確に自覚している訳ではないことが示唆された。

第5章(研究3-1)および第6章(研究3-2)では、幼児期後半頃の子どもの人形に対する認識を明らかにした。その結果、3歳以降、人形を独自の欲求を持つ主体として扱うことが可能になること、さらに5歳頃になると、大人が人形を操作することによって、人形を独自の欲求を持つ主体として扱うことのできる文脈をつくりだしていることを理解するようになることが明らかとなった。すなわち、5歳児は人形を操作する真の主体は大人であるという行為主体の二重性を明示的に理解した上で、人形を独自の欲求を持つ主体として扱うことを可能にする仮定的文脈を大人と共有するようになると考えられる。また、第7章(研究3-3)では、人形の欲求について説明する際に大人が人形を操作するかどうかによって、子どもの反応に違いはないことを確認した。3~5歳にかけての人形に対する認識の変化と「心の理論」との関連についても検討したが、両課題の通過率には関連が見られなかった。

研究1~3では、大人が人形を操作し、人形から子どもに直接要求を示すなどのインタラクションを行っていた。そこで、第8章(研究4)では3~4歳児を対象に、人形から子どもへの直接的な働きかけがない状況における大人の人形操作の影響を検討した。その結果、3歳児は、最初に大人が操作する人形とインタラクションを行うことで「人形を意図的の行為主体として扱う」ということをふり遊び場面全体における振る舞い方のルールとして大人と共有していることが示唆された。それに対して、4歳児は大人が人形をどのように扱っているかをその都度確認しながら、自身の人形の扱い方を自発的に調整するようになることが示された。

以上の結果から、幼児期における人形に対する幼児の認識とそれに関わる大人の人形操作の影響は以下のように変化していくことが明らかとなった。1~2歳頃、大人の人形操作によって人形の扱い方そのものが支えられていた時期から、3歳頃、行為主体の二重性を理解し始め、人形の扱い方を大人との間で了承し合うようになる。人形の扱い方についての共通認識を持つようになると、人形に心的状態を付与するなどのより複雑な人形の扱い方が可能になる。しかしながら、3歳頃にはまだ、行為主体の二重性を理解は暗黙的なものにとどまっており、大人が人形を操作し、人形を介して子どもに働きかけたり子どもの行為に応答したりすることで、人形を独自の欲求を持つ主体として扱うことができると考えられる。それが5歳頃になると、大人によって人形をそのような主体として扱う文脈がつくりだされていることを共有した上で適切な反応を示す段階に達する。このように、人形の扱い方についての大人との共有の質が変化する中で、大人の支えの影響は相対的に減少していくのだと考えられる。

研究3~4(第5~8章)では、ふり遊び場面における人形の扱い方だけでなく、そのような場面を離れたときの人形に対する客観的な理解についても検討した。その結果、5歳頃には、人形は実際には動いたりせず、欲求も持たないという概念的知識を獲得することが明らかとなった。

第9章では、これらの結果についてまとめ、本論文の意義と今後の展望について述べた。本論文の意義としては、以下の2点が挙げられる。1点目は、ふり遊びに用いられる人形に対する認識を、幼児期を通して統一的に明らかにした点である。先行研究では、各研究者の理論的立場や関心によって対象とする年齢や「ふりの理解」として扱われる現象が異なっており、それぞれの現象を最もよく反映するパラダイムが用いられてきた。そのため、各時期に子どもがどのような反応を示すかは明らかにすることができても、それらの反応を直接比較することはできず、ふりの理解がどのように変化していくのかを描き出すことは困難であった。また、ふり遊び場面における子どもの反応はふりの理解水準によらず同じように見えるため、子どもがどのような理解に基づいて行動しているのかは各研究者の解釈に委ねられてきた。

それに対して、本研究ではふり遊びに用いられる人形の特徴である行為主体の二重性に着目し、ある場面において人形を適切に扱うことができるかどうかだけでなく、人形とその操作者である大人のどちらの相手とやりとりを行うかを子どもに選択させるというパラダイムを設定した。これにより、幼児期を通して反応を比較検討できるだけでなく、子どもがどのような理解に基づいて反応したのかを切り分けることを可能にした。このことから、本論文は、先行研究で別々に検討されてきたふりの理解を、人形に対する幼児の認識という新しい観点から統一的に実証しするものであると言える。

2点目の意義として、ふり遊び場面における子どもの人形に対する認識をコミュニケーション過程において明らかにした点が挙げられる。先行研究では「心の理論」とふり遊びとの関連が注目され、主に子ども個人の認知機能の発達としてふりの理解が扱われてきた。しかしながら、ふり遊びでは大人が示す様々な振る舞いが子どもにとって知覚可能な手がかりとなっている。本論文においては、大人が人形を操作し、人形を介して働きかけたり、子どもの行為に回答することが、子どもが人形を意図や欲求を持った主体として扱うための手がかりとなっていたのだと考えられる。このように、ふり遊びは他者との相互作用のもとに成り立っており、子どもは大人の振る舞いに支えられながらふりを理解していく。よって、「心の理論」あるいはメタ表象能力という一つの側面からだけではなく、個人間の要因や発達にともなう理解水準の違いを含めてふり遊びを多層的に捉える必要があると考えられる。

本論文の限界としては、実験場面をいかに統制するかという問題や、子どもの行動反応の解釈可能性、人形への親和性などに関わる個人差や文化差の要因を考慮することを挙げた。今後はこのような課題も踏まえながら、人形に対する認識の発達的变化に関連する要因を検討すること、人形をふり遊び場面に用いることの意味や、そもそも幼児期の子どもが普段から人形にどの程度親しんでいるのかについて基礎的な知見を蓄積していくことで、ふり遊びやそこに登場する人形に対する子どもの認識を多面的に捉える研究を行っていくことが求められる。